彙報

心理學讀書會

豫餞會を兼ね、例會を五月二十六日午後三時より實驗場內演習室に於て開催大要左の如く岩井君の卒業論文內容發表あり、講演後學生集會所に於て一同晩餐を共にし九時過談笑裡に散會せり。

○精神物理學的方法に就て　岩井勝二郎君

『余の精神物理學的方法はフェヒネルのそれとは同じからず。寧ろヴントの心的測定法に類し、物理的補助手段を假用して心的要素殊に感覺の分量的關係並に其變化を研究する方法の謂にして、精神物理學的方法論は形式論及實質論の二部よりなるべきものなり。前者は在來の精神物理學的方法の形式的方面の分析を行ふを以て其任務とし、是等の方法に依りて得らるべき結果の數値の心理學的意義を闡明し由是、逆に是等の方法を批判し改良するは後者の任務とするところなり。

こゝに本論文は右方法論の序說とも見るべく先づ其由來、發達を略說し、次に諸家の分類觀に入り、終りに分類の見地を刺戟の按排、判斷の選擇及び結果の處理に置くべきを說き、更らに進みて簡單に方法論の一般的傾向を述べたるものなり。

次に『角の目測に關する一般的傾向に就きて』は主として銳角の範圍內に於ける過大視及過小視的傾向、これに及ぼす角の邊の方向の影響、角の大小の知覺と角を構成する幾何學的要素の知覺との關係、方向の辨別に關する一般的傾向、及び辨別閾測定に關する教學的處理法の比較の五種の題目に就き、前後五回に捗りて行ひたる實驗の結果を整理せるものなり云々。

社會學讀書會

五月十八日午後六時より學生集會所に於て例會を開く、出席者米田講師、高田文學士、學生九名。講演左の如し。

戰爭と民主的國家　岡谷　弘氏

右は、米國ミゾレイ大學教授バーナード氏の亞米利加社會學雜誌に掲載したる論文にして、もし世界が永久的の民主國となりたる曉に於て各自國產出の食糧を限度とし、人口增加を統制し得るに至らば戰爭の廢止可能なりと論じ、終りに米國の現歐洲戰爭加入を以て民主國の眞義に遠かるものなりと說けり。

同氏は冒頭スペンサーの「社會發展の一般傾向は軍時組織より產業組織に移動す、而して將來產業組織の發達したる國に於ては國家として特有の强制的努力は次第に跡を絕ち、終には民主的國家の實現を見るに至る」を引用し、之れを批評しながら論旨を進めて曰く、產業組織の成熟と雖も決して强制的なる政治組織を除去し得ざるは勿論、戰爭をも廢し得るものにあらず、且產業組織と民主政治との間には何等密接なる關係なしと。但し左の三條件

一、民衆をして社會に關する知識を獲得せしむること、

二、民衆の意思發表機關の發達、

三、政治機關の改良、

の成就により世界は漸次永久的なる民主國の出現を見るに至る。而して此民主國に於て各自國の供給し得る食物を限度として人口增

加に制限を加へ得るに至らば戰爭の如き絶無たるべしと。終りに米國の歐洲戰爭加入に付き論じて曰く「(一)經濟上より見るに目下米國には內亂の恐れなきは勿論、掠奪的產業階級もなく又特に自己階級の利益を計りて一般國民を度外視する產業階級もなし、且人口增加の結果食糧不足を來し爲めに外國に眼をそゝぐ必要にも逼られ居らず、(二)地理關係より見ても米國は廣漠なる海に遮ぎられ居るため他の强國の來寇の如きも想像するを得ず、故にもし米國が此の度の歐洲戰爭の渦中に捲き込まれ積極的に戰爭するが如き事あらば、こは民主國の眞髓に反するものなり」と結論せり。

實驗演習心理學講習會

東京市上駒込心理學研究會にては、兒童研究の實際に資する爲め、信州北安敎育部會と聯合し、來る八月一日より一週間、日本アルプス山麓、木崎湖畔、信濃公堂に於て、文學士增田惟茂、文學士土井壯良、文學士上野陽一の三氏を講師とし、心理學上の實驗發問及び統計の方法に就き、實地指導を主とする講習會を開く由。入會希望者は住所職業氏名を記し、往復はがきにて心理學研究會宛申込まば、會より諾否を通知すと。

新著紹介

聖德太子傳

塙野　黃洋著

元より謙遜ではあらうが「古い書物から得た材料のつぎはぎ多くの學者の言ひふるした研究の取りつぎ、そんなものゝ寄せ集めから出來た此の書物は歷書き直し書き直して居るうちに文章さへ筋の立たない辻褄の分はないものになつて居るかも知れない」と著者自ら述べられて居らるゝ處や、更に言葉を續けて「然しその偉大なる太子の傳を書かうと思つた裏情には毫しも僞りを留めて居ないといふ事を自分で振り返つて考へたゞけでも……」、又「此の偉人の眞面目を發揮し得る事は素より私の力の堪へ得る所ではないが之を爲さんと企てた自分の心もち丈にさへ私は重々の滿足を感して居る」といふ眞面目な告白から察すると本書は先づ嚴密な意味の研究物ではなくて何れかといへば寧ろ太子讃仰がその主眼であるらしく思はれる、隨つて著者の主觀が比較的强大な勢で內容の上に現はれて來ることも止むを得ないところであらう、であるから純學究的の立場から之を見れば或は色々な方面から批評質問せらるべき余地もあるであらう、然し若し一度深く本書述作の態度や性質を推測したならばそれは余りに酷に過ぐるといはねばならぬと思ふ、といつて私は本書の價値を學術的階級から引き落さうとするのでは決してない、たとへ太子讃仰がその主眼であるとしても決して月並の讃仰ではない、その一面に於ては確かに考證にまれ古代思想の解釋にまれ元より本書の性質上多少獨斷の誹は免れないとしても兎に角明快なる著者獨特の識見と燃ゆるが如き著者の熱心とが到る處躍如として發露せるを見る事が出來る、いはゞ盲從的外的讃仰ではなくてその讃仰たるや研究的批評的內的のものであるといひ得べきであらう。

一、緖論、二、太子の系譜及誕生、三、太子の幼時、四、馬子の大虐と太子、五、政治の改革、六、太子の外交政策、七、十七